

第9回平和首長会議総会

会議 V

全体総括・ナガサキアピール採択

2017年8月10日（水）11：15～12：15

長崎大学 中部講堂

- 議長 田上 富久（平和首長会議副会長、長崎市長）
- 会議報告 鈴木 達治郎（長崎大学核兵器廃絶研究センター長）
- 中村 桂子（長崎大学核兵器廃絶研究センター准教授）
- 朝長 万左男（核兵器廃絶地球市民長崎集会実行委員会委員長）
- ナガサキアピール読み上げ
- 松井 一實（平和首長会議会長、広島市長）





会議 V

開会

司会：大変お待たせしました。ただ今から会議 V を開会いたします。議長は、田上富久長崎市長にお願いいたします。

田上 富久（長崎市長）：皆さん、こんにちは。長崎市長の田上です。いよいよ第 9 回平和首長会議総会も最後のプログラムになりました。会議 V になります。この会議では、最初に会議 II、III、および会議 IV の内容について、各モデレーターを務めていただいた皆さんからご報告いただき、その後、ナガサキアピールの採択を行いたいと考えています。

(1) 会議報告

① 会議 II（都市の役割）

田上 富久（長崎市長）：早速、入りたいと思います。まず、会議 II の「都市の役割」のモデレーターを務めていただきました長崎大学核兵器廃絶研究センターの鈴木達治郎センター長から、会議 II についてご報告をお願いいたします。

鈴木 達治郎（長崎大学核兵器廃絶研究センター長）：会議 II のモデレーターをさせていただきました鈴木達治郎です。よろしくをお願いいたします。

会議 II のテーマは「都市の役割」で、ドイツ・ハノーバー市のヘルマン副市長、フィリピン・モンテンパ市のフレスネディ市長、フランスのマラコフ市とグリニー市からミシェル・シボ名誉事務総長とリオ市長のお二人、日本の綾部市の山崎市長に来ていただき、この 5 人から発表がありました。

ハノーバー市の発表は今日もありましたが、「50 Cities - 50 Traces (50 の都市—50 の跡)」のプロジェクトの他にも、そもそも広島と姉妹都市であって、平和首長会議メンバーの拡大に非常に大きな役割を果たしたということをお話ししていただきました。それから、毎年、国際司法裁判所 (ICJ) の勧告的意見が出された 7 月 8 日を記念して国旗を掲揚するフラッグデーとしているなど、非常にいろいろな試みをされていました。特に、被爆地から植樹されるイチヨウの木のプロジェクトというのが、未来につながるプロジェクトとして興味深かったです。

フィリピンのモンテンパ市のプレゼンでは、テロリストの ISIS の影響がフィリピンの子どもたちにまで及んでいるという衝撃的な紹介がありました。子どもたちへの平和教育の重要性が強調されました。

フランスのマラコフ市とグリニー市からは、フランスは核保有国ですから、核保有国の中で健闘・奮闘されているフランスの平和首長会議の活動のご紹介がありました。AFCD RP、LPACP という長い名前なのですが、この二つの組織をご紹介いただきました。それからアフリカとの協力の中で、若者を広島・長崎に派遣し、その中で平和教育を進めていくことの重要性をご紹介いただきました。暴力、貧困の深刻さ、貧しい人たちが気候変動の場合でも最大の犠牲者になるというような、核以外のいろ

いろな都市の抱え込む悩みについてご紹介いただきまして、最後に平和文化の重要性を強調されていたのが私にとっては印象的でした。

日本の綾部市は、日本最初の世界連邦都市宣言都市で、非常に活発に平和活動を続けておられます。中でもイスラエルと友好都市を結んでおられて、非常に印象的だったのが、「中東和平プロジェクト」と称した、イスラエル、パレスチナの双方から紛争孤児を招待して、2週間、綾部市で交流していただくプロジェクトです。2003年からやっておられるということで、印象的だったのが、当初の参加者が青年になって、感想として「親の世代では無理かもしれないけれど、自分たちの世代なら和平も可能かもしれない」とコメントされたということで、これも印象的なプロジェクトでした。

質疑応答に入り、平和教育の中身や、平和教育は現実にとどれだけ有効なのか、施策立案にどのような影響を与えるのかというような意見交換が行われました。さらに、フロアからの発言で、メキシコのカブレラ青少年局長から、メキシコのプログラムについての発言がございました。これが非常に面白くてユニークで、メキシコのある家庭にある銃などのいわゆる小武器を市役所に持っていくと交換してもらえるという小武器交換プログラムを紹介いただきました。市のレベルでの、グラスルーツでの軍縮のプログラムでした。

2番目に、フランスのダンケルクのトマーシェク議員から、戦争の記憶を継承する都市のネットワーク、メモリーシティーズというプロジェクトのご紹介がありました。

3番目に、やはり核保有国であるインドのマラパザーサリー市のマシュー国際課長から平和署名活動のご報告がありまして、実際に集められた平和署名をその場で市長にお届けいただくという感動的なシーンもありました。

4番目に、日本の北九州市の北橋市長から、長崎の嘉代子桜の植樹プロジェクトのご紹介がありました。

最後に、これも感動的だったのですが、イラクのイスマル元ルワンズ市長から、イラクにおける現在の、現実にまだ苦しんでいる現場の苦しみをご紹介いただきました。特に化学兵器の恐怖についてお話がありました。

小溝事務総長から、それぞれの都市でそれぞれのアプローチで平和のための取り組みを真摯に実行していることの実態が明らかになったことについて、非常に強い感銘を受けたという熱い総括がありました。「皆、真剣なんだ」というお話をされて、この経験の共有と連帯が平和首長会議の強さである、平和首長会議の力を今後も見せていきたいと思いますという熱い言葉で終わりました。

私から最後に3点だけ付け加えさせていただきます。私の印象なのですが、共通したテーマが三つありました。

一つは、「理性と感性のバランス」です。これはよく言われることなのですが、どうしてもわれわれは研究者ですので、理性の方に目がいきがちです。しかし、被爆者のお言葉、アートや写真、映画の話、「平和文化」という言葉から、やはり理性と感性の両方に訴えることが大事ではないかということをお教えられました。

二つ目は、「過去・現在・未来のつながり」です。平和教育といったときに、過去の記憶の継承だけでいいのかというフロアからのご発言がありました。過去に起きたことが歴史であり、歴史を学ぶこと、



会議 V

過去を知ることが現在を知ることにつながり、現在起きていることが未来につながるということを常に意識する必要があると思います。

三つ目は、会議Ⅳで私が痛感したことにつながるのですが、「ネットワーク」です。ネットワークというと、「つながり」という言葉や「連携」など、いろいろあると思います。これは平和首長会議の強さでももちろんあると思います。個々の人間のつながり、都市のつながり、それが社会全体のつながりになっていくということで、私が非常に感銘を受けたのは、平和首長会議の皆さんがそれぞれのまちで行っていることが、お互いに刺激し合って、融合して新しい力につながっていくということです。「ネットワーク」というと何か平べったい表現なので、あまり個人的には好きではないのですが、もう少し深いつながりが感じられました。

最後に、最終的にわれわれが心に留めなければいけないのは、人間性だと思いました。今回採択された核兵器禁止条約も人道主義的なアプローチを取っているのですが、やはり人間性を忘れては何事も実現しません。「都市の役割」のセッションの最後に、つい私も熱くなって、皆さんに唱和をお願いしてしまったのですが、ラッセル・アインシュタイン宣言の言葉でまとめとさせていただきたいと思っています。

“Remember your humanity, and forget the rest.”

ありがとうございました。

田上 富久（長崎市長）：ありがとうございました。この「都市の役割」というテーマは平和首長会議にとってはまさしく原点であって、根源的なテーマです。加盟都市が増えてくる中で、地域ごとの違いもいろいろ見えてきていて、このテーマは常に古くて新しいテーマであり続けますが、今、本当にいいまとめをしていただいて、これからまたこのテーマで議論していくときの非常に大きなヒントを頂いたような気がします。

②会議Ⅲ（若者の役割）

田上 富久（長崎市長）：続きまして、会議Ⅲに移ります。「若者の役割」のモデレーターを務めていただきました、長崎大学核兵器廃絶研究センターの中村桂子准教授から報告をお願いします。

中村 桂子（長崎大学核兵器廃絶研究センター准教授）：皆さん、こんにちは。田上市長、ご紹介ありがとうございました。

昨日の様子をスライドショーで流してもらえるとということなので、昨日の会議に参加されなかった方も、私の話を聞きながら雰囲気共有していただければと思います。

会議Ⅲは、たくさん若者の顔が写真の中に見えますが、「若者の役割」がテーマでした。平和や核兵器廃絶を目指す活動の中で、若者の役割が重要であるというのは常識というか、もう繰り返し言われていることです。先ほど鈴木先生のご報告にありましたように、理論と感性といいましようか、若者が特にいろいろな角度からアプローチの異なる人々や国の考え方を知り、その上で自分はどうか考える

のかを考えるために、知識というのはとても重要です。でも同時に、人間性をとおっしゃったこともつながりますが、若い人たちが、自分は直接体験していないけれど、被爆者や戦争の被害を受けた方々の思いに寄り添って、決してこれが他人事ではなく自分にも起こり得る自分事だと思えるか、そして自分は状況を変えるためにどう動けるだろうかと考えることができるか、言ってみれば感性の部分が本当に重要であると思います。先般、採択された禁止条約においても、軍縮不拡散教育がますます重要だということは指摘されているとおりです。平和活動を実践的に行った結果、そこで生み出されるものも重要ではありますが、それを行うプロセスに入っていくことそのものが若者の学びになるということを感じています。

一例を挙げますと、昨日、若者からの平和の企画の中で、被爆証言を、若者を含めた各国の人々が多言語化していくというような提案がありました。これはもちろん、その多言語化・翻訳された証言そのものが大きな意味を持っています。たくさんの人に伝わります。でも、その結果だけではなく、翻訳をするという作業は、その被爆者の方の感じたことや思いに心を寄り添わせなければできないことであり、当時の歴史的な背景もしっかり勉強しなければいけません。翻訳は単なる言葉ではなくて、その痛みや苦しみさえも自分のものにしようという姿勢がないとできないと思います。その意味で、若い人たちが実践的な平和活動を、各都市で、首長会議の加盟都市の皆さまと一緒にやっていくことが、いかに平和・軍縮不拡散教育の一環として重要であるかということ、昨日の会議Ⅲは証明した一つの場になったのではないかと思います。

具体的に昨日の会議の中身を少しご紹介したいと思います。まず、河野太郎外務大臣の非常に貴重なご挨拶から始まりました。その後、若者を巻き込んだ形で実際に活動されている平和首長会議加盟都市のお二方から事例発表があり、最初はイギリスのマンチェスター市、次にスペインのグラノラズ市からお話を頂きました。非常に多岐にわたる平和活動をご紹介していただき、スライドのお写真もたくさん見せていただきました。

例えばマンチェスターでは「プロジェクト G」という、被爆樹木であるイチヨウを使ったプロジェクトを紹介されました。私がとても印象的だったのは、被爆樹木という一つのモチーフを、教育の中で多角的に発展させていっていたことです。樹木なので、それを単純に植樹するというにすぐ結び付くのですが、それだけではない、そこからどんな企画をつくっていけるか、いわば企画力が問われるということの一つの実践例であったかと思います。

グラノラズ市においては、平和の文化を進めるということでお話を頂き、それぞれの都市が持つ歴史、戦争の傷跡といったものをいかに教育の中で生かしていくか、使っていくかということの非常に素晴らしい好例を示していただいたと思います。

続いて、広島と長崎の高校生、広島市立広島商業高等学校、長崎市立長崎商業高等学校の二つの高校の生徒さんから発表がありました。プレゼン自体が非常に堂々としたもので、それにまず圧倒されてしまったのですが、例えば広島のパースデパート、長崎の演劇部の取り組み、また、合わせて共同平和宣言を発しているというところもご紹介いただきました。高校生のできること、あるいは高校生ならではのできることの大きさのようなものをすごく感じました。若者といっても、小学生から20代など、それぞれの年代、それぞれの環境において全く異なるメリットがあり、それらを生かし



会議 V

ていくことが重要だということを感じました。

事例発表の後、後半のグループワークがありました。まず、グループワークに参加する一部の所属団体、ナガサキ・ユース代表団、高校生平和大使、京都外国語大学からそれぞれ事例発表がありました。

グループワークですが、昨日ここにご参加いただいた皆さまはどんな感想を持たれたのか、ぜひお聞きしたいと思います。多分、少々驚かれた方も多かったのではないかと思います。若者と都市で新しい企画案を練っていく。夢物語を語るのではなく、本当に実践することを目指して、自分たちがこれからやっていけることをイメージして企画を提案していく。この場で終わらせるのではなく、議論のための議論ではなく、本当に、例えば次の平和首長会議の総会で発表できるようなことも目指して行いました。インタラクティブな場でした。平和首長会議としては初のユニークな試みであったと思います。

参加した学生は全国から32人で、大学生、高校生、社会人が含まれていました。また、広島、長崎だけではなく、東京や京都、それから留学生も含まれ、非常にバラエティに富んだメンバーが六つの班に分かれました。企画の準備段階として、これまで約3週間にわたって準備を重ねてきたのですが、まず六つのグループに分かれて、それぞれの担当都市に関して調査をするということから始めます。初めて聞くような都市の名前もある中で、この都市にどんな企画を提案しようかと、先ほどプロセスが勉強だと言いましたが、まさにそういう形でゼロから勉強していくということを行いました。そして議論を重ね、時に担当都市の方に直接メールで問い合わせをさせていただくような形を取りながら、企画案を短期と中長期に分けて練っていきました。

昨日、50分間にわたり、実際に各班にA班からF班まで六つの班に分かれてそれぞれ行いました。若者とグループワークをしてくださった都市は、東京都武蔵野市、フランスのヴィトリー・スールセヌ市、ベルギーのイーペル市、メキシコのメキシコシティ、カメルーンのフォンゴ・トンゴ市、そしてクロアチアのピオグラード・ナ・モル市の六つになります。もちろん発表させていただいた企画案は、決してこの六つの都市だけに限ったことではなく、ここに参加していただいた多くの、日本だけではない世界の都市の皆さまに、もし何か、これは面白い、ヒントになると思うものがあれば、ぜひ若者と今後一緒に進んでいくことを考えていただきたいと思って、準備をしていったものです。

どんな具体的な提案が出たのか、時間もありませんのでごくわずかですが、ご紹介したいと思います。まず、学生の若者たちの思いとして、決して関心がないわけではないけれども、平和活動という敷居が高いとか、なかなか参加しづらいという声が上がりました。従って、「平和のたまり場」という案も出ましたが、若者が気軽に集まって、普段は話せない政治や平和について話す場を定期的に自治体が設ける、これを各都市でまずはできるのではないかと。そこに市長・首長の皆さん、あるいは地域の有名人というようないろいろな方が集まると面白いのではないかとというような提案も出ました。

また、お互いの国の異なる戦争体験や被爆体験について若者自身が聞き取りを行い、それを基にスピーチコンテストを行うという提案も出ました。さらに、そのスピーチコンテストの優勝者は、各都市に交換留学に行けるといった案も出ました。また、交換留学という案は幾つかの班から出たのですが、単なる交換留学ではなく、平和をテーマにした交換留学は実践的にやっていけるのではないかとという案も出ました。

さらに先ほど、証言の翻訳の話を紹介しましたが、そうした留学のプログラムの一環として、もっともっと留学生が翻訳のプロジェクトに関わることも重要ではないかというような話が出ました。これは学生ならではの提案が多かったのですが、SNSなどいろいろな新しい技術を使うということで、私はあまり詳しくなかったのですが、AR (augmented reality)、VR (virtual reality) といったものをつくって、例えばドイツにはつまずきの石というのがあるのですが、同じように各都市で平和の道、平和の小道のようなものがあって、そこにARの眼鏡を掛けて歩くと、いろいろな都市での歴史や平和活動の流れが分かる、そういう情報を見られるような場所を各都市に技術を使ってつくれるのではないかというような話もありました。

また、ワークショップやイベントの提案もたくさん出たのですが、それを一度、単発の企画で終わらせるのではなく、どうすればそのイベントをきっかけとして、それぞれの都市に、先ほど「平和の文化」という言葉もありましたが、そういうものを根付かせていけるかということが大事だという指摘がありました。

小さなまちからこそ大きな変化が起こせるという力強い若者の言葉もありました。また、先ほど鈴木先生の話にもありましたが、ネットワークの話が出ました。せっかくそれぞれがいろいろなことをやってもなかなか情報共有ができていないのは本当にもったいない、平和首長会議の各都市で、若者部会、青年会のようなものをつくるなど、新たなチャンスをこれから生み出していくためのネットワークをつくるのが本当に必要だという意見がたくさん出てまいりました。

発表内容は本当にたくさんあるので、外に模造紙を掲示させていただいています。皆さん、帰りがけにお時間があれば少し見ていただければと思います。

昨日、終了後に学生たちが、せっかくこれだけ仲良くなっていっぱい話をしたので、もっともっと話をしたいということで、夜に集まって反省会をしました。反省会という言葉がいいのか分かりませんが。出た話の一つが、都市の市長さんと話できたのはとても良かった、普段はない経験だということです。これは本当にそうだと思います。また、自分たちが何をやりたいかだけではなくて、その都市にあるものをどう活用するか、あるいは都市側の意向を聞いてどう折り合わせていくか、そういう作業を若者がする機会がなかなかないので、これが面白かったと言うのです。コミュニケーションを取ることが、とてもとても新鮮であったと。また、反省会でみんなが口をそろえて言ったのが、「これがスタート地点だ」ということです。既に名刺交換をして、連絡先をたくさん交換できたということで、若者たちはホクホク顔でしたので、昨日の会議が終わりではなく、ぜひこれからつなげていくということを、本当にこれが一歩だということをぜひ一緒にやっていきたいと思っています。以上です。ありがとうございました。

田上 富久 (長崎市長):ありがとうございました。先ほどの「都市の役割」が、平和首長会議が始まったところからのテーマだとすると、この「若者の役割」は新しいテーマで、新しい加盟都市の共通関心事になってきています。そういう中で、今回は非常にチャレンジだったと思うのですが、私も近くで見ている話を聞かせてもらって、本当に活気がある、ライブ感がある運営の仕方で、画面を見ながら、中村先生に実況放送をしてもらって、どのテーブルがどんな雰囲気になっているのかも伝えてもらい



会議 V

ながらのセクションで、本当にやってよかったと思います。

ちょうどこのフロアの2階席に、近くの四つの中学校の中学生たちがその様子を見学に来ていたのですが、少し遠いということで階段から下りてきて、実際にこのステージの上に乗って、ワークショップの少し年上のお兄ちゃんお姉ちゃんたちの話に耳を傾けているというのがとても印象的でした。

この試みは、今回、大成功だったと私は思います。これからこの平和首長会議がさまざまな活動をしていく中でも、今回を第1回としてぜひまた取り入れていければと思います。皆さんも、若い人たちと市長さんたちが話し合っつくり上げた企画について、模造紙をこのフロアの向こうに掲示していますので、ご覧いただいております。

③会議Ⅳ（NGO・市民団体・被爆者団体等の役割）

田上 富久（長崎市長）：続きまして、今日行われたプログラムですが、会議Ⅳ「NGO・市民団体・被爆者団体等の役割」のモデレーターを務めていただきました、核兵器廃絶地球市民長崎集会実行委員会の朝長万左男委員長からご報告をお願いします。

朝長 万左男（核兵器廃絶地球市民長崎集会実行委員会委員長）：ほとんどの方が先ほどの最後の会議Ⅳにご出席だったと思いますので、あまり報告する形でのまとめは用意していませんが、三つのお話を頂きました。

この会議のテーマは「NGO・市民団体・被爆者団体等の役割」という、いわゆる都市の構成員がつくる団体の役割がテーマでした。

1番目に、ドイツのハノーバー市から、来年から始まり、3年間で、ドイツ、ヨーロッパ、ベルリンなどの20以上の都市を回る展示「50 Cities - 50 Traces（50の都市—50の跡）」の紹介がありました。これは発想が非常にユニークです。平和活動をするときは、何かテーマを決めて、そのテーマで人を集めて、討論などをするものですが、そういう発想ではなく、人間の人生というものははかないという言葉が出てきたのですが、人間は一人一人の人生の中で何かを残したいという欲求を基本的に持っているものであり、それが大きくなれば都市の遺産になるのですが、個々の人間が営むものの集合体が歴史になっていき、その歴史の中に残る足跡、遺産を絵画などいろいろな芸術作品で見たいというものです。

来年は核兵器不拡散条約（NPT）ができてから50周年を迎えるということで、EUの国ですから、北大西洋条約機構（NATO）の問題も含めて、核兵器廃絶に結び付くような問題もそこに織り込んでやっていく企画です。最大の目的は、やはり人に集まってもらわないと何事も始まらないということです。そこで初めて対話が始まって、友情が生まれる。友情が平和の基礎となっていくという考え方です。そういう考え方で、ある女性の芸術家の作品を網羅してやっていかれるということで、大変新鮮な企画です。われわれ平和活動をしている者にとって目を開かれるようなものがありました。

2番目に、すぐお隣の韓国、特に長崎には一番近い韓国の島である済州島から発表がありました。済州島はピースアイランドということで、ここの平和活動は歴史に根差しています。済州島が日本の植

民地から解放された後、どうやって朝鮮半島を統一するかということが非常に大きな課題になったときに、いろいろな考え方の違いができてきて、争いが起こって、まだ朝鮮戦争が始まる前の話ですが、濟州島で反対派の人たちの虐殺があり、3万人の方が亡くなられたそうです。そういうことがこのピースアイランドの発想につながっているという歴史をまずお話いただきました。

そして、自治体としては平和研究院というものを設置されています。地理的にも日本、韓国、中国のちょうど真ん中に濟州島がありますので、入り口のようなところがあって、そういうところに集まっただいて、いろいろな平和フォーラムを開いています。例えば、国連の国連訓練調査研究所（UNITAR）の人材育成プログラム、青少年フォーラムなど、ここには日本から参加された方も多いと思います。

そういう中で一つの大きなテーマが、今分断されている南北朝鮮の交流であり、これを民間レベルでしっかり築いていこうというボランティア団体、芸術・文化の団体もあって、そういうものを統合した会合の開催を濟州島の政府が支援していくということです。そういうことで非常に長い歴史を持っています。最近の集会には、世界中から6,000人の参加があったそうです。

北東アジア非核地帯構想というのが長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）の研究活動の中でもあります。もっと広く平和の問題を広く扱うピースベルト地帯をつくりたいということです。それから、自然の生態系（エコロジー）の問題にも目を向けて、そういうものも取り込んでやっていくということです。具体的な企画としては、北朝鮮の人たちを招いて対話をしていく濟州フォーラムをやっておられます。南北相互訪問ということです。濟州島にある大きな山、それと北朝鮮の白頭山、その辺の観光地の交流も計画してやっておられて、なかなか素晴らしいことをされているということをお聞きしました。

最後に、地元の被爆者団体の長崎原爆被災者協議会、全国組織としては「被団協」という言葉で有名ですが、被団協そのものの歴史を含めた発表がありました。1950年代から、特にビキニの水爆実験の後に、日本ですごい市民運動が巻き起こりました。東京都の家庭の主婦たちが始めた運動から原水爆、原爆と水爆の禁止を求めていくNGO活動が始まりました。その歴史をずっとたどっていかれました。長崎では、被爆という負の歴史を経験し、それによって健康障害も負った、いわゆる hibakusha と英語でも呼ばれるようになった方々のうち、特に若い方々が、青年の会や乙女の会をつくられ、それが統合されて、長崎原爆青年乙女の会が形成され、その後、全国的な日本被団協が形成されていきました。そして、経済的にどうやって会を運営していくかはなかなか大変だったと思うのですが、国際的な活動を展開していくことになります。

それから、国連の軍縮特別会議で「ノーモア・ヒロシマ、ノーモア・ナガサキ、ノーモア・ウォー」という言葉を発した長崎被爆者の山口仙二さん、数年前に亡くなられましたが、そういう方の活動によって世界的に非常に広まっていきました。それが延々と途切れなく続いていて、最終的には今回の国連のニューヨークの交渉会議で採択された核兵器禁止条約の前文の中に、そういう被爆者の活動を評価した言葉が入りました。

これは私の個人的な考えなのですが、被爆者の証言が世界中に広がっていったのはいったのですが、原爆から50年たったころは、かなり悲観的な見方を被爆者の方々はしておられました。どうも私たち



会議 V

の証言活動は世界中に広まっていない。本当に核兵器廃絶に結び付くようなところまで、世界の人に原爆の悲惨さを伝えきっていない、伝わらない。伝える努力はしたけれども伝わっていないのはいか。それから 22 年たち、戦後 72 年にして、特に 5 年ぐらい前から、非人道性についての理解が世界中で大変広がり、この禁止条約をつくろうという運動の原点になっていったのではないかと思います。そういうところを被災協の横山副会長からご説明いただきました。

その三つの話があって、総合的なディスカッションをして、たくさんご質問も出ました。中でも重要な質問がありました。今度の核兵器禁止条約に絡んで、日本の場合は国の安全保障に基づく政策として、核の傘政策があるものですから、なかなかこの条約にすぐ入ることができないという国政レベルでの決定がある一方、被爆者団体はもちろん、一般市民の中には、この禁止条約に被爆国の日本がどうして加盟しないかという非常に大きなフラストレーションが存在します。ドイツはそれはどうでしょうかという質問が出ました。

ハノーバー副市長のヘルマンさんがお答えになったのは、ドイツでも一般市民の中にはやはり、アメリカの核兵器がドイツに配備されているのは危険だと見なす市民が多く、禁止条約には入るべきだという考え方が多いのだけど、NATO の一員であるドイツとしては、それはできないということでした。NATO の一員のオランダが交渉会議に出席したただ一つの国なのです。ただ 1 カ国の反対票を投じた国なのです。やはり条約には入れないということです。

今、日本も抱えているそのような重要な問題です。では、政府マターに市民の声をどう上げていくか、そこに都市の役割があるのではないかということで、小溝事務総長から大演説がございました。今度の条約の中に、核兵器国あるいは日本のような核の傘国が参加できる条文を入れる運動をこの平和首長会議がやってきたのだ、それが実現したのではないかとおっしゃっていました。今後はさらにそれを進めて、どうやったら条約派と、安全保障派といいますか核兵器派の間を取り持っていけるか、ここが分裂にいかないで融合していけるかだという話がありました。国連の事務次長の中満泉さんが、昨日の祈念式典にも参加して話しておられましたが、国連としても、NPT 体制の中心となっている核兵器国と、今度の核兵器禁止条約を推進してきた国々との分断が起こらないような方策が何かないか、いろいろな意見を聞きたいということでわれわれも意見を求められました。そういう現在最も重要な問題が、この会議では一般の市民の方からのご質問で触発されて、非常に素晴らしいディスカッションでございました。

その他いろいろあったのですが、全てお話しすると時間がなくなっていくしますので、もう終わります。市民社会が果たす役割そのものが都市の活動につながっていくということで、大変素晴らしい会議になったと思います。以上でご報告を終わります。

田上 富久（長崎市長）：ありがとうございます。まさしく会議Ⅳは市民社会の役割ということで、この平和首長会議にとっては力の源になっている部分ですが、さまざまな分野のさまざまな地域によっての違いもある、歴史も違う、そういう中でのご報告の中でいろいろ学べるということも、今回のこのセッションの中で非常に印象的なことだったと思います。ご報告ありがとうございます。

それでは、フロアの皆さん、参加都市の皆さんで、感想をぜひという方がいらっしゃったら挙手を

お願いします。今お二人手が挙がりましたが、時間の関係でここで感想は一人だけにさせていただきたいと思います。

シュエイリー (ハラブジャ市・イラク)：シュエイリーと申します。イラクのハラブジャ、クルディスタンのメンバーとして来ました。1,200km 超、多くの国の国境を越えて、皆さんと共に犠牲者を追悼するためにやってきました。二つの悲劇があったということです。私の地域は、世界の平和のために、加盟都市の皆さんと共に努力をしたいと思います。シンジャルの市長が来ておりましたが、飛行機の都合がありますので、この午前中のセッションに参加できておりません。ただ、ステートメントを読んでほしいと言われていました。代わりに読みたいと思います。では、読み上げます。

皆さん、イラクのクルディスタンで大虐殺が3年前に起こったということをご存じでしょうか。それについての言葉です。この21世紀において、虐殺が起こった。それは、2014年8月3日イラク・クルディスタンにいるクルド人たちに対して行われ、それを行ったのはISISというテロリストです。大半は市民が犠牲になったということで、国際的に連合してこのISISに対抗しなければいけないという機運となりました。

犠牲となったヤジディ教徒はシャンガル (シンジャル)、イラク・クルディスタンの古い地域に多く住み、モスルから西150km、そしてシンジャル山の近くにありま。ずっと宗教的あるいは民族的な理由から抑圧を受けてきました。最近の歴史の中で目に余る、住民の虐殺が行われ、イスラム教への改宗が強要されました。ISISのテロリストたちは、2カ月前にモスルでイラク軍から奪った武器を使って、この平和なシンジャルの地域で虐殺を行いました。何千人も殺され、一つの穴に埋められて、女性も子どもも捕虜となりました。生き残ったヤジディ教徒の人たちは、シリア、あるいはクルディスタンに逃げました。6,417名、うち3,387人の女性、600名の子どもを含めて、モスル、シリアまで捕虜として連れていかれ、そして最も残虐かつ非人道的な扱いをジハーディストに受けました。女性は身体的な集団レイプ、あるいは性的奴隷としての扱いを受けることになりました。

クルディスタン地域の政府は協力して、こういう人たちの救援に当たりました。何とか3000名を超える人たちを救うことができました。46カ所の大規模な墓地が見つかり、多くの方の遺体が埋められております。しかし、行方不明者が5,000名を超えております。

ペシュメルガが2015年11月に攻勢を変えて、ISISからまちを解放することができました。そして、完全に85%以上の都市が報復で破壊を受けて、まちの復興が遅々として進まないため、多くの住民が戻れずにいます。

シャンガルの人々は平和な生活を望んでおります。ここで国際社会の役割は非常に大きいと思います。こうした人たちに対して、2014年8月のような虐殺が二度と繰り返されないように、直接の支援を復興のために必要としております。もともと美しく歴史豊かな地域であったのです。究極的にクルディスタンの人たち、ヤジディ教徒を救うためには、独立した国家の成立が必要かと思っております。悲劇に満ちた歴史について、クルディスタンで9月25日に住民投票が行われることになっています。将来について決定する住民投票が準備されています。

この会議に参加していらっしやいます平和首長会議の皆さま、長崎にお集まりの皆さま、世界平和



に貢献する上でも、クルディスタンの地域の人たちを支援してください。そして、正当な権利として、国と平和を求めていることに対して支援を頂きたいと思います。ありがとうございました。

田上 富久 (長崎市長) : ありがとうございました。ただ今、イラクの代表の方からご報告いただきました。平和首長会議では、加盟都市が増える中で、こういう地域のさまざまな課題について、全体での活動と同時に、地域ごとに、エリアのリーダー都市を中心に活動していくという動きもスタートさせています。

それでは、以上でフロアからの発言の時間を終わりたいと思います。

(2) ナガサキアピール採択

田上 富久 (長崎市長) : 次に、ナガサキアピールの採択に移らせていただきます。お手元にお配りしております「ナガサキアピール」があるかと思います。昨夜、ナガサキアピール起草委員会において取りまとめをしたものです。それからもう一つ、会議 I において決定いただきました行動計画の中の「核兵器禁止条約の早期締結」を推し進めるという項目があります。その第一歩として、この第 9 回平和首長会議総会で「核兵器禁止条約の早期発効を求める特別決議」を取りまとめております。皆さまに既にお配りしております。その二つについて、これから採択に入りたいと思います。

まずは、会長の松井一實広島市長から、ナガサキアピールを読み上げていただきます。

松井 一實 (広島市長) : それではナガサキアピールを読み上げます。

ナガサキアピール 核兵器廃絶と世界恒久平和に向けて

私たち世界 162 か国・地域の 7,417 都市の代表は、長崎市において開催された第 9 回平和首長会議総会に参加し、『核兵器のない世界』の実現を目指して—2020 年に向けて、今、私たちがができること—をテーマに活発な議論を行った。

1945 年 8 月、広島・長崎に原爆が投下された。原爆の凄まじい熱線と爆風と放射線は、一瞬にして建物をなぎ倒し、街を一面の焼野原に変え、そこに住む子どもや女性、高齢者を含む 21 万人以上もの人生を無慈悲に奪い去った。人間の尊厳が奪われた悲惨な光景を目の当たりにしながら辛うじて生き残った被爆者は、体と心に決して癒されることのない傷を抱えて 72 年を生き、放射線によるガンなどに苦しみながらも、命を削る思いで「こんな思いを他の誰にもさせてはならない」と、この非人道的な兵器の廃絶を世界へ訴えてきた。

しかし、依然として核兵器は地上に 15,000 発近くも存在し、核兵器を近代化する計画に巨額の前算が投じられている。なおかつ、北東アジア、ヨーロッパ、南アジア、中東など世界各地で核兵器が使用される危険性が高まっている。また、意図しない事故による核兵器の使用や、核テロの危険性も無視できない。

これまで平和首長会議は、一刻も早く「核兵器のない世界」を実現するために、「2020 ビジョン (核兵器廃絶のための緊急行動)」に基づき、市民社会や NGO 等と連携しながら、核兵器禁止条約の早期

実現を求める市民署名活動や、国際会議の場で核兵器禁止条約の制定を訴えるなど、様々な活動を展開してきた。

この夏、核兵器禁止条約が誕生した。初めて国際法によって核兵器禁止を明文化した条約が制定されたことを心から歓迎する。国連加盟国の大多数の賛成を得たこの核軍縮の歴史的な一步は、被爆者が声をからして訴え続けてきた「長崎を最後の被爆地に」という言葉が人類共通の願いであり、意志であることを国際社会に示した。そして、私たち平和首長会議加盟都市は、たとえ一つのまちの平和を願う思いは小さくても、力を合わせれば、そして、あきらめなければ、世界を動かす力になることを実感するとともに、私たちの活動の方向性が間違っていないことを確信した。

この誇りを胸に、私たち平和首長会議は、次の行動を強力に進めていく。

核兵器禁止条約の早期発効をめざし、より実効性の高い条約となるよう尽力し、核兵器禁止条約採択の原動力となった、被爆者、市民社会、条約推進国との連携をより一層強め、条約への参加を全加盟都市から自国の政府に働きかけていく。特に、核保有国と核の傘の下にいる国々の政府には強く働きかけていく。

平和首長会議は、加盟都市人口の10億人以上の人々を代表し、核兵器廃絶と平和のために活動してきた。しかし、世界各地では核兵器のみならず、化学兵器、武力紛争、難民、飢餓、貧困、差別、暴力、環境破壊、近年はテロなど、地域特有の課題が出てきている。これらの課題に対処するため、私たちは、平和、都市と教育に関する国連の持続可能な開発目標（SDGs）を達成するための具体的な活動を支援する。さらに私たちは、地域の課題に特化した人道活動を推進し、市民社会の安全と幸福を守るため、今後更に加盟都市を拡大し、地域ネットワークを強化することにより、課題解決に積極的に取り組む。

平和首長会議は平和の実現を阻む諸問題の根本的な解決のため、平和文化の創造に向けて取り組んでいく。このため私たちは、子どもや若者の視点から未来を担う次の世代へ戦争体験を継承していく平和教育の重要性を認識している。平和首長会議の加盟都市は、平和教育実施のための活動の企画と推進を意欲的に進めていく。平和首長会議のネットワークに参加することで、都市はそれぞれの施策のなかで、平和文化を実践することができる。

平和は全世界共通の願いである。私たちは、一人ひとりが国家や人種や宗教を超えてお互いを世界市民として尊重し、信頼し、その安全を自分のこととして考える「人間の安全保障」に基づいた平和を追求しなければならない。それは「核兵器のない世界」を実現する道のりでもある。平和首長会議にはこの長く困難な道のりを、志を同じくするあらゆる個人、団体、国家と緊密に連携し、必ず達成する強い決意とともに、全力を尽くして進む。

平和首長会議は国連及びすべての政府に対して、次の行動を強く求める。

1. NPT を遵守するとともに、核兵器禁止条約に参加すること。

核兵器が二度と使用されないよう、NPT に基づいた確実な核軍縮を誠実に進めるとともに、核兵器禁止条約を勝ち取った市民社会の大きな声に耳を傾け、条約の早期発効に向けて、署名、批准すること。

核兵器禁止条約は、核兵器廃絶実現のための将来の包括的核兵器禁止条約に向けた重要な一步であることを再確認すること。

2. 人間の尊厳を奪う地球規模の問題の解決に尽力すること。



会議 V

核兵器、化学兵器、紛争、難民、飢餓、貧困、差別、暴力、環境破壊、テロなど、人間の尊厳を奪う地球規模の問題の解決に向けて、誠実かつ速やかに尽力すること。

3. 平和文化の創造、また、被爆や戦争の実相を学び、触れ、理解する機会の創出に尽力すること。

政府・国際機関の代表者に被爆地広島・長崎を訪れることを求め、被爆の実相に触れることにより核兵器がいかに非人道的であり、一刻も早く廃絶すべきであることを心に刻むようにすること。そのような訪問により、一刻も早い核兵器廃絶の必要性をより理解できるようになる。また、世界各地の戦争や内戦の悲惨さを市民が広く共有するよう、都市における戦争体験の継承や、原爆展、平和研究及び教育を全面的に支援すること。

上記を踏まえ、第9回平和首長会議総会では、2017年から2020年までの行動計画を採択した。私たちはここに、1日も早い核兵器廃絶実現と世界恒久平和に向けて全力で取り組むことを誓う。

2017年8月10日 長崎にて 第9回平和首長会議総会
以上です。

田上 富久（長崎市長）：ありがとうございます。

ただ今、松井会長が読み上げたナガサキアピールについて、ご質問等ございませんか。

それではお諮りいたします。ナガサキアピールを原案どおり採択することに賛成の方は拍手をお願いいたします。

—拍手—

田上 富久（長崎市長）：ありがとうございます。

それでは続いて、私から特別決議を読み上げさせていただきます。

核兵器禁止条約の早期発効を求める特別決議

「世界の都市が国境を越えて連帯し、ともに核兵器廃絶への道を切り開こう」との広島・長崎の呼びかけから始まった「平和首長会議」は、核兵器廃絶のためには、核兵器を法的に禁止する枠組みが不可欠であるとの信念のもと、その早期実現を訴えてきた。

この訴えが実を結び、核兵器の禁止を明文化した核兵器禁止条約が、2017年7月7日、国連本部において国連加盟国の6割を超える122か国の賛成で採択された。これはひとえに、被爆者や我々と志を同じくする人々の「核兵器は廃絶すべきだ」という心からの訴えが世界の人々の共感を得て、国々を動かした結果であり、世界162か国・地域の7,417の都市が加盟する平和首長会議は、人類の悲願である核兵器廃絶への大きな一歩である「核兵器禁止条約」の採択を心から歓迎する。

我々、平和首長会議の加盟都市は、核兵器禁止条約採択後に開催された「第9回平和首長会議総会」において、核兵器のない世界の実現に向け邁進する決意を新たにした。

「長崎を最後の被爆地に」

我々、平和首長会議の加盟都市は、ここ長崎の地で、この言葉が市民社会共通の願いであり、意志であることを確認し、この言葉を永遠のものとするため、力を尽すことをここに決意した。

平和首長会議は、核兵器保有国を含む全ての国に対し、条約への加盟を要請し、条約の一日も早い発効を求めることをここに決議する。

2017年8月10日 長崎にて 第9回平和首長会議総会
以上です。

ただ今、読み上げました特別決議について、何かご質問等がございますか。

それではお諮りします。特別決議を原案どおり採択することに賛成の方は拍手をお願いいたします。

—拍手—

(3) 閉会

田上 富久 (長崎市長) : ありがとうございます。

第9回平和首長会議総会の集大成として、ナガサキアピールと特別決議を採択させていただきました。なお、このアピールと特別決議は、全ての加盟都市をはじめ、各国政府、国際連合等の国際機関、NGO等の関係団体に送付いたします。

以上をもちまして、会議Vを終了いたします。時間が予定よりも少し押しております。会議運営をうまくできませんでしたが、円滑な会議運営に皆さまにご協力いただきました。心から感謝を申し上げます。ありがとうございます。